

銀

賞

『青い氷の結晶』

青い氷の結晶

千葉県 市川高等学校一年 十^そ川^{がわ}理^り世^よ

レモン色の太陽の真下にある真っ白な雪山。その高い山の頂上には木でできた小さな小屋がぽつんとある。少しヒビが入っていてもろそうだが、小さくてかわいい。

そう、その小屋だ。その小屋で、おじいさんは一人で暮らしている。

真っ白な髭^{ひげ}に淡い青色の瞳。メタルフレームのオーバル型のメガネ。そんなおじいさんは薬屋だ。山の麓^{ふもと}にある街に住んでいる人たちのために、毎日薬を作っている。風邪^{かぜ}薬、塗り^ぬ薬、咳止^{せきどめ}め。山で取れる薬草からいろいろな薬を作っている。

あまりにも薬がよく効くため、おじいさんは街のみんなから山の「魔法使いさん」と呼ばれている。

「おばあちゃんの腰が悪くなっちゃったの。魔法使いさん、塗り薬ちよーだい!」

「魔法使いさん、最近この子がどうにも咳が止まらなくて。良い咳止め、もらえないかしら?」街のみんなはそっおじいさん呼び、薬を買っては次の日に小屋に戻り、

「効いたよ! ありがとう」

と、おじいさんに笑顔で言う。

だが、おじいさんはただの素晴らしい薬屋ではない。本物の魔法使いだ。魔法使い、とは言っても、箒に乗って空を飛んだり、杖つえを使って魔法を使ったりすることはない。おじいさんの魔法は水と植物の魔法だ。道具なんて必要ない。

そんなおじいさんの趣味は、人々の幸せな思い出を雲しらくもに閉じ込めること。街の人々の幸せな思い出を淡い青色の雲に閉じ込め、見たい時に見られるようにしている。街のみんなが薬を買いに来ない時は、その雲の中に閉じ込めた温かい思い出を見て幸せに過すごしている。

おじいさんはずっと一人暮らしだ。しかし、ずっとみんなと繋がっているから一度も寂しいと感じたことはない。

ある朝。おじいさんの山の付近を今までにない吹雪が襲襲つ。大雪と強風のせいで山の頂上にある薬屋に街のみんなは来ることができない。悲しいことに、吹雪はそう簡単には止まず、おじいさんが街のみんなと会えない日は長い間続く。

やることがないおじいさんは部屋の角にある、古い木の戸棚を開ける。中にはたくさん緑色の植物が綺麗きれいに並べられている。おじいさんは一番手前の植物を見る。そして、もふもふとした葉っぱに乗る小さな雲を指先で触れる。

すると、小さな雲は宙うちゅうに浮かぶ。宙に浮かんたまま、どんどん大きくなっていく。おじいさんはその雲を優しい眼差まなざしで見る。淡い青色の雲はお皿ほどの大きさになってから、いきなり止まる。

パーン、と音を鳴らして弾ける。弾けた雫の粒が丸く弧を描き、円になる。円の中をおじいさんは淡い青色の瞳でじーっと見つめる。

すると、円の中から赤ちゃんの幼い笑い声が聞こえる。幸せそうな笑い声のポリウムが段々と大きくなり、おじいさんの耳元に響く。と同時に、粒の円の中にニコニコと嬉しそうに笑う赤ちゃんの愛らしい顔が映る。

「魔法使いさんのお陰でこんなに元氣になりましたよ。本当にありがとうございます」

優しく赤ちゃんを抱きながら、おじいさんに向かって母親は言う。そしてにっこりと微笑む。

おじいさんはそんな母親の笑顔を見て思う。あの赤ちゃんも今はもう立派な男の子だ。皮でできたリュックを背負って、学校に通っている。スポーツにも励んでいるそうだ。

スーッと粒が元の雫に戻る。ポタツ、と音がして雫が元の葉っぱの上の位置に戻る。

おじいさんは微笑む。そして、次の雫に手を伸ばす。

おじいさんは思い出を片っ端から見っていく。

抱き合っている母と子。

撫でられている犬。

車から家族に向かって手を振る父。

おじいさんは見ている間、ずっと幸せだ。

雪山をはしやぎながら滑る男の子。

輪になって雪だるまを作る子供たち。

ほっぺを赤くしてフッキーを食べる女の子。

だが、何日も見ていると、おじいさんは思う。みんなに会いたい。私はずっとひとりぼっちだ。今、街のみんなは何をしているのだろう。気になる。

吹雪が強くなる。寒い風がヒューツと吹き、ヒビの入った木の窓を叩く。ガタガタツと窓が音を立てる。雪もさらに積もる。このままではこの先もしばらく外は歩けないだろう。

肌を刺すような冷たい床がおじいさんのしわしわの足の温もりを徐々に奪う。冷え込んだ空気がおじいさんの首をひんやりとさせる。

風がドアを叩くたびに心が叩かれたように、おじいさんは寂しくなる。

みんなに会いたい。街のみんなはどうしているのだろう。

あの犬は今、幸せに吠えているのだろうか。

あの女の子はあの男の子と仲良くなれただろうか。

あのお母さんは無事に赤ちゃんを産むことができただろうか。

みんなに会いたい。街のみんなは今どうしているのだろう。

凍^こえるような寒さの中、おじいさんは扉^{かど}へ向かう。小屋の外に出て、藍^{あいいろ}色の空を見上げる。白い、弱々しい手を、冷たい空気をふり切りながら前に出す。

街のみんなは大丈夫だろうか。

私のことが心配だろうか。

私に会いたがっているだろうか。

おじいさんはそと、儚^{はかな}い氷の結晶を手に受け止める。そして手をゆっくりと握る。

おじいさんはそのまま小屋に戻り、古い暖^{だんろ}炉のそばに行く。ゆったりと腰を下ろすと同時に、ゆっくりと手を開く。

開いた手から淡い青色の雫^{しずく}が浮かぶ。

水の雫には、大きなクリスマスツリーの周りに集まっている街の人の姿が映る。みんな、蠟^{ろうそく}燭を両手で持ちながら微笑んでいる。

楽しそうに過ごしている街の人々を見て、おじいさんは悲しくなった。

自分は魔法使いだ。だから直感でどの草が薬になるかわかった。どの草をどのようにして混ぜれば薬になるのかわかった。薬をどう体に取り込めば病^け気や怪^け我が治るか直感でわかった。街のみんなはよくおじいさんをすこいと褒^ほめた。おじいさんはみんなから笑顔で褒められるたびに自分が物知りであることを誇りに思った。

だが。

おじいさんは考えにふける。自分が誰かよくわからない。いくら薬についてはわかっていても、自分が誰なのかがわからない。ただいた。そこに。気づいたら自分はおじいさんで、魔法使いで。一人で住んでいた。山の頂上にある小屋に。

家族がいなくて、ひとりぼっちで。

本当に寂しかった。おじいさんにとっては街の人々が今までは家族だった。だが街の人々はずっと遠くにいる。この吹雪が続く限り、ずっと会えない。

しかも、自分がいけないのに、街のみんなは嬉しそうにクリスマスを祝っている。

おじいさんはその日から何も食べなくなる。

集めていた思い出も見なくなる。思い出の植物が並べられた戸棚の扉が空いたまま、おじいさんはただひたすらに、椅子に座ってボーッとすることになる。

何日か経つ。太陽が沈み、月が出て、夜になる。吹雪も止んできたが、まだ風は強く、雪も降っている。

おじいさんはいつも通り椅子に座ってボーッとしている。目の焦点が合わないまま、空間をじーっと見つめている。

時計の短針がカチツと音を鳴らして九時になる。おじいさんは時計を虚ろな目で見て、ゆっくりと立ちあがる。

うとする。

と、その時。

嗅いだことがないような柔らかい甘い香りが宙を舞う。

聞いたことがないような美しい歌がゆつくりと流れる。

見たことのないような薄紅色の空気がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはうつとりとして目を細める。

薄紅色の空気がだんだんと白色と青色に変わっていく。

体を包み込んでいた空気が綺麗にゆつたりと外へ流れていく。

おじいさんはその光景の美しさに魅了され、何も考えられなくなる。

おじいさんの周りを白と青色の空気が円を描きながら囲む。

白と青からコーンフラワーブルーの美しい氷の花が咲く。

花に見惚れていたおじいさんの目の前の空間からいきなり、キラキラ輝くダイヤモンドダストが現れる。結晶

の光が反射して一点に集まり、そのアザーブルーの光の一点がだんだんと大きくなる。そして、アザーブルーの光が 花火のようにパーンと弾けて、光の花が咲く。

おじいさんは眩い閃光で思わず目を閉じる。

突然甘い匂いがなくなる。と同時に、音楽が止まる。空気も消える。

おじいさんは驚いて、目を開ける。目を開けた途端、おじいさんはそのまま椅子にもたれて失神する。

おじいさんの目の前にはこの世のものではないと断言できるほどの、美しいユキヒヨウがいた。

コバルトブルーの瞳。

純白なもふもふの毛。

ピンクの大きな肉球。

真っ白な銀世界に現れる、神秘的で美しいものを全て集めたような容姿だ。

「お前が心配でここにきたのだ。お前が失神してどうする」

とても澄んだ、綺麗な声でおじいさんに優しく語りかける。

おじいさんはゆっくりと目を開く。ユキヒヨウの姿に圧倒され、目がユキヒヨウのコバルトブルーの瞳に釘付けになる。

「お前最近何も食べていないだろう。家族がいなくて自分が誰かわからなくて寂しい、とのことだと聞いたが、本当のようだな」

そう言つてユキヒヨウはおじいさんの椅子に左の前足をかけ、後ろ足で立ち上がる。そして、空いた右の前足でおじいさんの背中をさする。

「お前は山の精霊たちによつてここにきた。お前がここにくる前、度々街の人々に災難が降りかかるにも関わらず、彼らは病気や怪我を治す知識がなく、人口がどんどん減少していった。私たちは精霊だが、自然を感謝してくれているこの街の人々を守りたいと考えている。だからどんどん倒れていく僕い彼らを助けてやりたかった」
ユキヒヨウはおじいさんの心臓からおじいさんの顔に視線を移す。

「お前は魔法使いだ。だから薬を扱う知識もあり、人間とも関わり合える立場だった。精霊たちはお前をここに寄せれば街の人々を助けることができる、と考えた。そこで私たちはお前を魔法使いの村から引っぱり出してこへ連れてきた。いろいろなところへ旅立って、自分の任務をこなす他の魔法使いたちと違って、お前はいつも家にこもっていろいろな薬を作っていたようだったから」

ユキヒヨウは部屋の中を見渡す。

「お前の記憶を消した理由も同じだ。私たち精霊は、お前の記憶を消さずにこの山へ送ったら、きっとお前は嫌がって、この街の人々を助けられないだろう、と」

ユキヒヨウはそう言い、雫が乗っている生き生きとした植物が綺麗に並べられている戸棚を見る。

「だがもつ心配はなさそうだ」

ユキヒヨウは前足を床につける。そして何もない空気から青い物体を取り出し、おじいさんに握らせる。

「これをここに置いていく。私の大切なガラスだ」

雫の形をしたガラス。上のアイスブルーが、下に行くたびに溜まってコバルトブルーに近づく。

まさに小さな氷の洞窟^{どうくつ}、スーパースーパーブルーだ。

「これを見ていると辛い気持ちガスツと吸い込まれて辛くなるだろう？」

その通りだった。おじいさんはその綺麗なガラスを見た途端、辛かった気持ちが全てガラスに吸収され、辛くなくなっていた。

ユキヒヨウは雪のように真っ白な尻尾^{しっぽ}を左右に動かして言う。

「こつこつ吹雪で街のみんなと会えなくなる日はまたあるかもしれない。その時のためにこれを置いていく」

おじいさんはガラスのなめらかな輪郭^{りんかく}を手でなぞるようにして触る。一見冷たそうなガラスだが、冷たくない。とはいっても暖かくもない。本当に不思議な感覚だ。

おじいさんの淡い青色の瞳がユキヒヨウの深い青色の瞳を見つめる。

ユキヒヨウはじーっとおじいさんの目を見返して言う。

「先程言った通り、お前には大事な任務^{まこと}がある。それを全うしろ」

ユキヒヨウはそう言い残し、おじいさんに背を向けた。

柔らかい甘い香りが宙を舞う。

美しい歌がゆつくりと流れる。

薄紅色の空気がおじいさんを柔らかく包み込む。

おじいさんはユキヒヨウを見つめる。

おじいさんの視線に気付いたのか、ユキヒヨウは振り返る。

「心配するな。街のみんなもお前の家族だが、私を含めた山の精霊たちも、世界各地にいる魔法使いたちも、全員お前の家族だ。お前はひとりぼっちじゃない」

そう言い残した後、ユキヒヨウは再び後ろを向き、跳ぶ。

白と青になった空気がユキヒヨウを囲み、そしてそのまま、香りと音楽と共に消える。

残された魔法使いは顔をしわくちやにして、嬉しそうに笑う。